

## はじめに

本書は、社会調査と統計分析の初心者（高校卒業程度の方を想定しております）が身につけるべき、調査・データ分析へ取り組む姿勢や最低限おさえておくべき学術的なスキルをまとめました。これから本格的に学術的に調査・分析作業を行う方の「入口」です。

併せて、質問紙を作成したり、観察やインタビューを企画したが、実地に出てデータをどのように集めて分析すればよいか、さらにデータをどのようにレポートやプレゼンテーションにまとめればよいか、わからずにつまずいている方もいると思います。本書では、そうした方々にもわかりやすいように特にデータの収集法だけでなく、分析やプレゼンテーションの方法も後半にまとめました。

この本の姉妹編には、『アカデミック・スキルズ データ収集・分析入門 社会を効果的に読み解く方法』という中級編の本があります。基礎編である本書は「学部1年生から2年生くらいのレポートでの調査・分析」がテーマで、社会調査の超基礎的な準備・実施からデータ収集・分析までの一連の手続きを説明した導入書になっています。一方の中級編は、「学部3年生から4年生、大学院生が行う本格的な学術研究論文（学部の卒業論文や大学院の修士論文、博士論文）での調査・分析」を対象にしています。このレポートと学術研究論文の決定的な違いは、学術研究論文に進めば進むほど、社会調査・統計分析を行う上での「社会的なマナーや倫理」を厳しく問われる点にあります。中級編では調査・分析の「入口」をおさえた方々が、本格的な学術論文を執筆するレベルに移行することを前提としました。そして、社会調査・統計分析のプロセスでより高い確かなレベルの研究活動を遂行できるよう、社会的なマナーおよび倫理を遵守するための方法論を詳説しております。

講義のレポートを書く段階の社会調査・統計分析の方法をまずは着実に身につけたい方、データの集め方自体で初心者の方には、本書の読破をお勧めします。そこが身につく、卒業論文以上の学位を得るための論文を書く段階になったら、社会調査・統計分析を実施する上での「社会的なマナーや倫理」をより厳しく問われますので、それらを詳説している中級編をお勧めします。最近の大学の学部や大学院の紹介文を読むと、育てたい学生の像に「社会的なマナーや倫理を遵守して確かなビジネスや研究をできる人間」を挙げるところが少しずつ増えてきました。この中級編は、いち早くその動向をとらえ社会的なマナーや倫理を遵守する社会調査・統計分析のポイントを紹介している、数少ない本になっています。是非このレベルまで進めるように姉妹編共々の読破を筆者は期待します。

私はこれまで、大学院や大学で教鞭をとり、さまざまな大学院生や学部生の研究の指導を行ってきました。研究は、先行研究の洗い出し、自分自身の研究テーマを取り巻く社会的な背景の明確化および自らの研究目的の設定、研究を進める上でとるべき方法論の明確化、実際の市民への実地調査実施等、調べることのオンパレードです。就職しても、若い間は上司や先輩に「これについて調べておいて」と頻繁に言われます。政策づくり、ものづくり、サービスづくりの現場に出て市民の声を実際に集める役目も任せられるでしょう。

要は、我々の社会生活と調べることは、切っても切れない関係にあります。調べることがない人生はありません。『調（チヨウ）』の漢字を分解すると、言（言葉や考えという意味）＋周（隅々まで行き届くという意味）から、「調」＝「隅々まで考えが行き届くこと」と解釈ができます。語源に従えば、調べるとは、あるテーマの隅々にまで研究する者の考えが正確に行き届くようにするための重要な作業なのです。研究内容に誤りがないようにし、成果の隅々にまで研究者の考えが正確に反映されるように、我々研究者は絶えず調べております。

ここまで書くと大げさですが、調べた結果は多くの人が見ます。そのデータがいい加減なものであれば、その後の見た人の行動すら間違った

ものにするかもしれません。ゆえに我々は質の高いデータを得られるように、よりよい調査を実施できるように努めたいものです。本書では、アカデミック・スキルズのシリーズとして、これから調査を行う初心者を主な対象に、調査の計画・実施とデータの分析の基礎について、事例をふんだんに交えわかりやすくまとめました。

この本をまとめるにあたり、慶應義塾大学教養研究センターから多大なるご指導やご支援を得ました。併せて、多数の研究者のみなさまのご支援を得ましたこと、ここに御礼申し上げます。

本書を読んだみなさまが、ご自身のすばらしい「調査&データ分析の世界」を形作られ社会をより良くしていくための調査、データ分析を展開されることを心より希望しております。

2015 年 8 月 1 日

著者を代表して

西山敏樹

# Contents

|                                                 |           |
|-------------------------------------------------|-----------|
| はじめに                                            | 3         |
| <b>第1章 実地調査ってなに？</b>                            | <b>9</b>  |
| 1. 「調べる」の意味                                     | 10        |
| 2. 調査を用いたレポートを執筆し、発表まで行う場合の<br>基本的な流れ           | 11        |
| 3. 調べるが必要な場面                                    | 14        |
| 4. 実地調査を成功に導くためのポイント                            | 15        |
| 5. 実地調査のスケジュールと人数の問題                            | 19        |
| <b>第2章 調べ方とデータのいろいろ</b>                         | <b>23</b> |
| ——どのようなデータを集めるのか                                |           |
| 1. 同じ研究テーマでの調査方法の分類の事例<br>「商店街活性化に向けたヒントを調べる場合」 | 24        |
| (1) 「見る（観察する）」調査                                | 26        |
| (2) 「聞く」調査                                      | 27        |
| (3) 「質問紙を配布して回答を得る」調査                           | 29        |
| (4) 「広く情報通信技術を介して回答を得る」調査                       | 30        |
| 2. データの種類について                                   | 31        |
| <b>第3章 調査の計画立案と準備</b>                           | <b>33</b> |
| 1. 事例から学ぶ「見る」調査（観察調査）                           | 34        |
| 2. 事例から学ぶ「聞く」調査（インタビュー調査）                       | 43        |
| 3. 事例から学ぶ「質問紙を用いた調査」                            | 52        |
| 4. インターネットを用いた社会調査                              | 60        |

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 第4章 データの分析 .....                    | 69  |
| 1. 本章の位置付け .....                    | 70  |
| 2. データ分析 .....                      | 70  |
| 3. 表をつくる .....                      | 73  |
| 4. 表の作成 .....                       | 74  |
| 5. 分析 .....                         | 76  |
| 6. Excel によるデータ分析の手順 .....          | 80  |
| 第5章 データの可視化 .....                   | 83  |
| 1. 可視化できる要素 .....                   | 84  |
| 2. チャート .....                       | 85  |
| 3. 高度な可視化 .....                     | 87  |
| 4. 可視化してみよう .....                   | 89  |
| 5. アンケートの可視化 .....                  | 105 |
| 6. 関係性の可視化 .....                    | 107 |
| 7. まとめ .....                        | 108 |
| 第6章 研究成果の発表について .....               | 109 |
| 1. 研究成果の発表の流れ（パワーポイントの流れ） .....     | 111 |
| 2. パワーポイント資料の作り方の三大基本事項 .....       | 112 |
| 3. 文字ベースのスライド資料の基本 .....            | 113 |
| 4. 絵や画像資料をベースとしたスライドの基本 .....       | 114 |
| 5. 式のスライドの基本 .....                  | 115 |
| 6. グラフのスライドの基本 .....                | 116 |
| 7. 表のスライドの基本 .....                  | 117 |
| 8. パワーポイントでのプレゼンテーション実行のポイント .....  | 118 |
| 9. 調査の結果・分析をレポートや論文にまとめる際の注意点 ..... | 119 |
| 附録 .....                            | 123 |
| あとがき .....                          | 139 |



## 第 1 章

---

実地調査ってなに？

この本がテーマとしている「調査」、すなわち「調べる」とは、一体どうということなのでしょう？ いくつかの辞書で「調べる」の意味を引くと、大体次のようにまとめられます。

## 1 「調べる」の意味

わからないこと、あるいは、不確かなことについて、色々な方法を用いて確かめること。

つまり「実地調査」とは、「わからないこと、あるいは、不確かなことについて、色々な方法を用い、研究テーマの最前線である現地に出向き確かめること」と定義づけられます。

この本では、大学入学直後のみなさんがわからないことや不確かなことについて、どのように確かめていくのが正しい方法なのかを説き明かしていきます。通常大学では、自分自身の専門性を磨くために、興味のある講義を受講し、研究室に入り卒業論文を書いたり卒業制作（卒業論文の代わりにアート作品や物品の試作をすること）を行って、卒業します。

この大学の4年間では、教員が講義の内容について多くのレポートを学生に課しますし、大学生活の集大成として卒業論文や卒業制作を行うことになります。まさに、わからないことや不確かなことについて色々な方法で確かめる、「調べる」プロセスが目白押しです。

この本では、レポートを書いたり、卒業論文・卒業制作をまとめる過程で、わからないことや不確かなことを確かめるための「色々な方法」に着目して、以下でわかりやすく解説していきます。一言で「調べる」と言っても、「見る（観察する）調査」、「相手へじかに聞く調査」、「質問紙で答えてもらう調査」等、色々な方法があります。これらの様々な



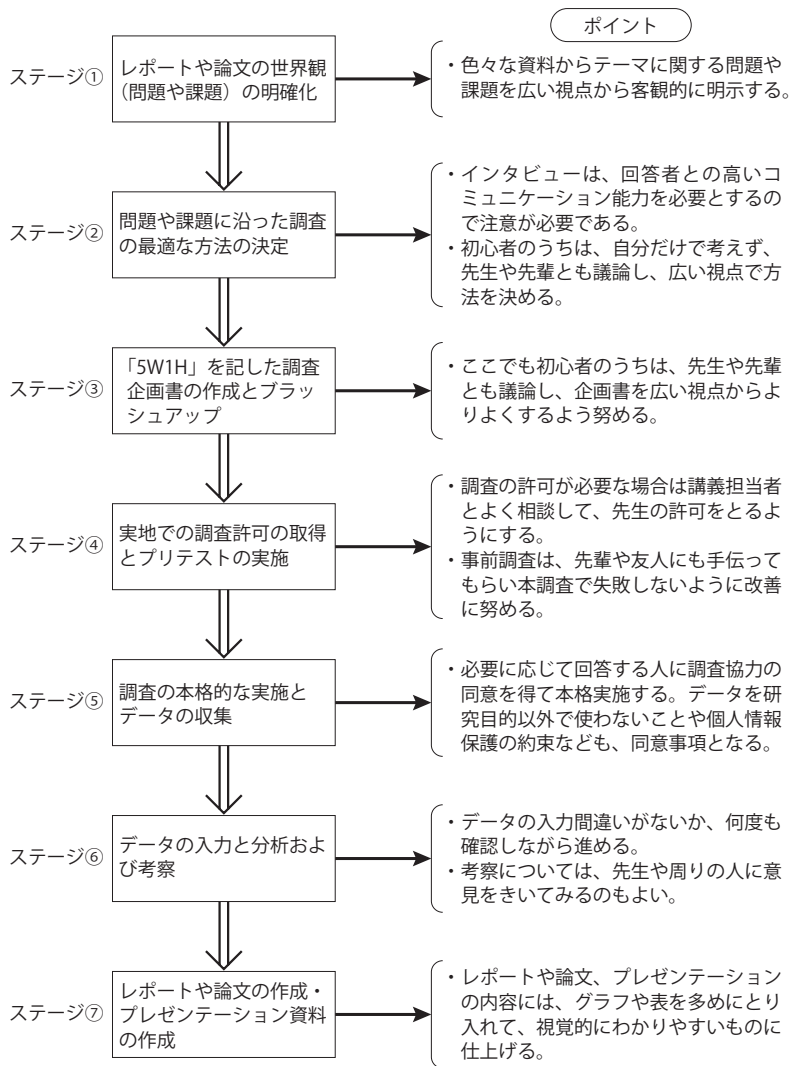
方法を解説しており、実際に調べる段階になった時に立ち戻ってもらえる一冊に仕上がっています。

本書を読むことで、実地調査の初心者でも、様々なタイプの実地調査の基礎が身につきます。調査すべき項目の明確化、調査の計画、プリテスト（事前調査）、本調査の実施、結果の分析と考察、成果のプレゼンテーションまでの一連の基本的な流れをマスターできます。ここで学んだことを基に、社会的なルールや倫理面に配慮して、学部4年生位の卒業論文から大学院生の研究レベルについても学びたい方には、『アカデミック・スキルズ データ収集・分析入門 社会を効果的に読み解く方法』という中級の本があるのでお勧めします。

## 2

## 調査を用いたレポートを執筆し、発表まで行う場合の基本的な流れ

では、ここで「商店街活性化に向けた提案」を行うためのレポートを例にしながら、何らかの調査法を用いたレポートを執筆する際の基本的な流れについて考えてみましょう。流れと要点を図1にまとめてみました。



全体的に心がける3つのポイント

- ①先生や周囲の人の目も含めて客観的で公平な姿勢というものを終始保持する努力
- ②調査の「5W1H」を明確にしながら調査計画をしっかり立案
- ③事前調査（プリテスト）を必ず行い、本調査がうまくいくか検証

図1 調査を伴ったレポート・論文作成の流れ

まず、レポートのテーマの世界観、すなわち、どのような問題と課題がテーマの周辺に存在するかを知りましょう。新聞や文献（専門誌や本等）、図書館にあるデータベース（統計類）やインターネットの情報を駆使して、問題や課題を調べます。事例に沿うと、ここでは商店街というものを取り巻く一般的な問題、課題を明らかにするステージになるわけです。

そこで、商店街を利用する多くの利用者の意見を集める必要があると判断できるならば、「質問紙を配布して回答を得る調査」や「情報通信技術を介して広く回答を得る調査」という量的な調査に進みます。また、利用者の買い物特性や商店街での移動の特性等に注力する必要があるれば「見る調査」、質問紙では得られない一層深い利用者が考える商店街活性化のヒントを得る必要がある場合や商店街で商売を実際に行う方に深く意見を聞きたい場合等には「聞く調査」へと進みます。テーマの問題や課題に沿って、調査の方法を具体的に決めます。

調査法が決まったら、用いる調査手法を前提の「5W1H」を決めて企画書をまとめます。企画書は、先生などの周辺の人にも適宜見てもらいながら、実施上の問題がないかを点検しながら、質を上げていきましょう。さらに調査の実施に実地を管理する人がいる場合は、主に文書で許可をとります。最後に、プリテスト（事前の試験的な調査のこと。これを行うことで調査が失敗しないか最終的に点検可能）を行い、本格的な調査実施となります。

さらに、収集したデータを Microsoft Excel 等の統計分析ソフトに入力して、分析作業を行います。この成果を Microsoft Word 等のワープロソフトに含めレポートや論文にします。併せて Microsoft PowerPoint 等を用いてプレゼンテーションを行えるようにまとめます。特に最近では、調査・分析・発表の一連の流れを大学教育で重視する傾向にあり、本書もプレゼンテーションの要点について第6章で詳しくまとめておりますので、お読みください。

## 3

## 調べるが必要な場面

一言に「実地調査」と言っても、色々な種類の調査があります。実地調査は、文字通り「**実地（調べたいテーマに関係が深い場所）に近づいたり、出向きながら、わからないことあるいは不確かなことについて、色々な方法を用いながら確かめること**」と定義できます。

まず大学の1～2年生でよくある実地調査を伴うレポート課題としては、次のような事例があります。

### (1) 実際に何かを観察して実態を記録する課題

あるテーマ（高齢者の駅の中での移動状況、お店の中で高齢者が困っていること、生物の行動特性等）に関して変化を記録しながらレポートをまとめなさい、という課題。こういう時は、本書で取り上げている第3章1節の「見る調査」（観察調査）をよく読んでみてください。

### (2) 実際にインタビューして街の声を集める課題

あるテーマ（観光・交通・市民の購買・都市の緑化等、まちづくりに関係するテーマ等）に関して市民の声を聞きながらレポートをまとめなさい、という課題。こういう時は、本書で取り上げている第3章2節の「聞く調査」（インタビュー調査）をよく読んでみて始めましょう。

### (3) 簡単な質問紙を配布しデータを集め分析する課題

あるテーマについて、実際に質問紙を配布して回答者の意見を集め、その収集データを分析する課題。学部1年生や2年生は、本格的に質問紙を配布し研究を行う学部3年生以上の活動の準備期間として、社会調査および統計分析の演習として行われる場合が多く、レポートのテーマも学生の興味のあることで設定してよい場合が多い。最近は、情報処

理関係の講義で、質問紙ではなく、インターネットを使ったデータ収集を学生にさせる講義も増えてきている。こういう時は、本書で取り上げている第3章3節「質問紙を用いた調査」から第3章4節「インターネットを用いた社会調査」までをよく読んでみてから始めましょう。

#### (4) 資料の検索に関する課題

あるテーマ（特定の政策や経済問題、法律の成立過程や国際紛争の解決プロセス等の社会科学的テーマ等）に関する過去の文献や新聞記事を検索して、それらの内容をまとめなさい、という課題。こういう時は「資料検索」という調べるプロセスが必要になります（ただし、こちらについてはアカデミック・スキルズシリーズ・『資料検索入門』を参考にしましょう）。

## 4

## 実地調査を成功に導くためのポイント

さて、調査には色々な方法がありますが、「すべての方法に共通する成功へのポイント」というものがあります。本章ではすべての調査法に共通する成功へのポイントを紹介します。

### (1) 客観的で公平な姿勢というものを常に意識しながら調査を行うこと

調査をする人は、常に客観的（特定の立場にとらわれず、物事を見たり考えたりする姿勢）で、公平な姿勢（すべてのものを同じように扱うこと。特定の人や物事に偏っていないこと）を意識しながら調査を行う必要があります。例えば過去に次のようなケースがありました。

### ●事例：客観性や公平性を失った調査の事例

- ・東京から札幌へ移動する場合に使いたい交通手段を市民を対象に調べるときに、調査を行う学生が趣味的に飛行機好きで、飛行機の利点を鉄道や船に比べて誇大に伝えてしまったケース。
- ・今後の電力開発のあり方を市民を対象に調べるときに、学生が太陽光や小水力等の再生可能エネルギーを進めるべきだと考え、原子力発電でのデメリットを強調しすぎてしまったケース。
- ・ある土地の望ましい活用法について市民を対象に調べるときに、調査を行う学生が農地を広めるべきだという考えをもっていたため、住宅地にするメリットを適正に伝えなかったケース。

みなさんは、自分に限ってそんなことはない、と思ったかもしれませんが。しかしこれらは、実際にあったことです。我々人間は、やむなく特定の感情や思想を持ちますし、調査の初心者の時ほど、それらに影響されるものです。言い換えれば、調査の経験を積まないと、特定の感情や思想にとらわれない客観的で公平な調査への姿勢は養われないと言えます。

特定の感情や思想を排除し、客観的で公平な姿勢で調査に臨むことで、色々なバイアスがなくなり、質の高い公正な役立つデータがはじめて得られます。上記の事例のように物事のメリットやデメリットを回答者へ伝えるときは、それらを客観的かつ公平に伝えられるかどうかを事前に複数のメンバーでチェックしておくことが反省材料でした。調査は一人よがりに進めることが一番危険で、複数の眼を含めることが成功へのポイントになります。

## (2) 調査の「5W1H」を明確にしながら調査計画をしっかりと立案すること

調査を成功に導く二つ目のポイントは、調査の「5W1H」を明確にしながら調査計画をしっかりと立案することです。要は、次の各点を常に考えつつ調査計画を立案することです。

## ●すべての調査の計画で重要な「5W1H」

- ・ What／Which

何を調べるか、どれを調べるか→調べる項目の吟味。

- ・ Where

どこで調べるか→調べる場所の吟味。

- ・ When

いつ調べるか→調べる日時の吟味。

- ・ Who

誰に調べるか→調べる相手の吟味。

- ・ How

どのように調べるか→調べる方法の吟味（どの調査手法を用いるのか）。

調査の計画の段階で、これら5W1Hのすべてを明確にしておかない限り、準備もうまくなりかなくなりますし、その先の調査実施段階にもうまくなることはできなくなります。併せて、1人で5W1Hを意識しながら調査計画を立案しても、それが妥当かどうかをしっかりと評価することも必要です。大学の研究室であれば、研究室の教員や先輩・同級生等に計画の案をチェックしてもらえばよいと思います。他の人の視点を入れることが大切です。

### (3) 事前調査（いわゆるプリテスト）を必ず行い、本調査がうまくいくかを予め検証すること

どんな調査を行うにしても、本調査の前に余裕をもって事前の調査（これをプリテストと言います）を行うことが大切です。プリテストを行うと、本調査で失敗してはいけないことや失敗しそうなことが予めわかるので、とても重要です。例えば、街頭で調査を行う場合に人通りが予想以上に多いので本調査ではそれに気をつけて行う、また、調査を行う場所では子どもの行き来が意外と多くそれに配慮して調査を安全に行うことが必要等、スムーズに本調査を進める上での実地ならではの情報を得ることができます。みなさんは、プリテストを行い本調査が失敗しな

いか試しておくことが大切です。プリテストを行うことで、本調査をより効果的に行う上でのポイントも抽出することができ、結果を本調査に反映させることが大切です。

### ●事例：事前調査の効果

- ・街頭で、大学の後輩3名に手伝ってもらい市民を対象に好きなゆるキャラを調べようとしたら事前調査で3名の質問の仕方が異なっていることがわかり、本調査では聞き方を統一できた。
- ・質問紙を用いて調査をしようとしたら、事前調査で回答者の一部が質問紙の文言の解釈を誤解する事例を発見できて、本調査ではその文言を誤解の起きにくいものに変更できた。
- ・駅で許可をとり乗客の流動の量をカウントしようとしたら、事前調査から計画していた場所を貨物の台車が多く通ることがわかり、本調査ではカウントしやすい別の場所に改めた。

こうして、事前調査を行うことで本調査を成功に導き、データの質をより高めることが可能です。本調査の前に、余裕をもって事前調査を行う習慣をつけるようにしてください。

どんな調査をするにしても、この三つのポイントを常に心得ながら作業を進めましょう。

### ●いかなる調査をするにしても意識しておくべき「成功への三大ポイント」

- (1) 客観的で公平な姿勢というものを常に意識しながら調査を行うこと
- (2) 調査の「5W1H」を明確にしながら調査計画をしっかり立案すること
- (3) 事前調査（いわゆるプリテスト）を必ず行い、本調査がうまくいくかを予め検証すること



## 5

## 実地調査のスケジュールと人数の問題

実地調査のスケジュールと人数の件については、学部生のレポートの水準を考えると、おおむね図2や図3の通りになります。図2が一人で行う場合、図3が2ないし3人のグループで行う場合です。通常は、教員も無理のない範囲で図2や図3のイメージで実地調査を伴うレポートを出題するはずですが。グループで実地調査を行う場合には、一人の時と異なり人数分の作業上のボリュームを求められることが通常で、その分たくさんの時間をかけてじっくり行わないといけなくなります。

基本的な流れは、一人で行う場合、2ないし3人のグループで行う場合、いずれも同じになります。つまり、(1) テーマとする事項で何が掘り下げべき調べる必要のある問題なのか、(2) その中で特に現在調べておく必要のある優先度の高い問題の選び出し、(3) 5W1Hを記した調査企画書の作成と周囲の人々との議論によるブラッシュアップ、(4) 実地調査許可の取得とプリテスト実施、(5) 本調査の実施、(6) 取得したデータの入力及び分析、(7) 考察を行いレポートや論文、プレゼンテーションファイルの作成、という流れになります。通常2ないし3人で行う場合、特にデータの量が求められるので、定量調査の代表格である質問紙調査では他の質的な調査に比べ時間がかかりますし、それなりに時間をかける必要があると覚えておきましょう。

教員が一人で行うよう指示した場合には致し方ありませんが、もしそういう制約がない場合には、2ないし3人で実地調査をした方が効果的です。「三人寄れば文殊の知恵」と言いますが、やはり3人くらいで行うと実地調査そのものを一層客観的に見られ、効果的で効率的に行う知恵が出てくるものです。特に、聞く方法・見る方法・質問紙で調べる方法でのすべてでバイアス（一人で行うことでついつい偏りや主観が出ること）を取り除くことに数人での作業は有効です。例えば、政治学である

人の政治的志向に沿う回答が出ないよう誘導的な質問を予め排除する上で有効なことは容易に想像がつくと思います。実地調査を行う場合には、数人で広い視野から透明性や客観性を高めることが偏りの排除につながり調査の質を高めるのに極めて大切ですから、このことは是非覚えておいてください。

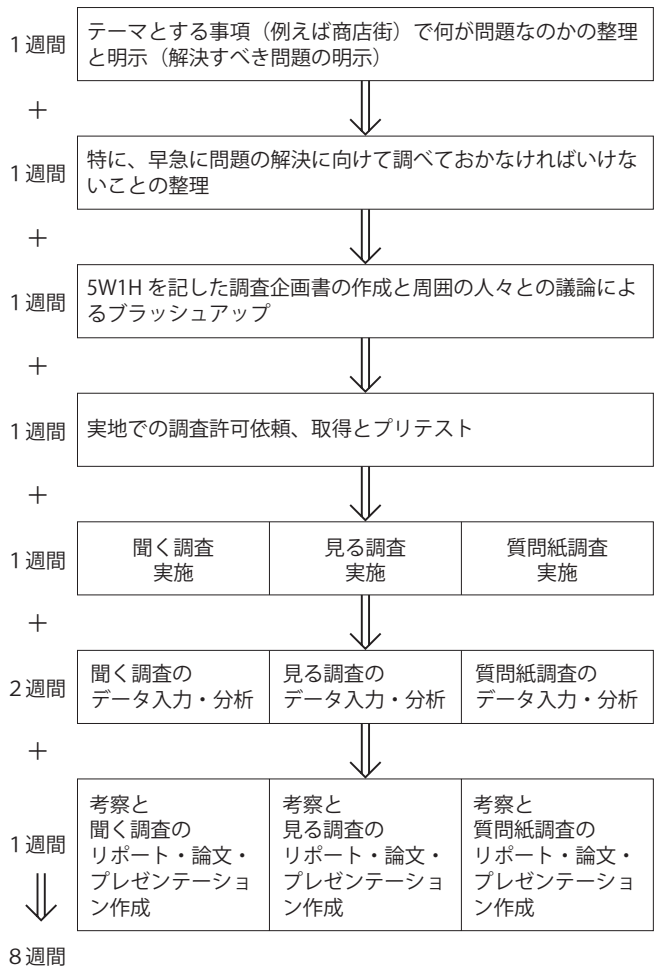


図2 スケジュールのモデル（1人のレポートの場合）

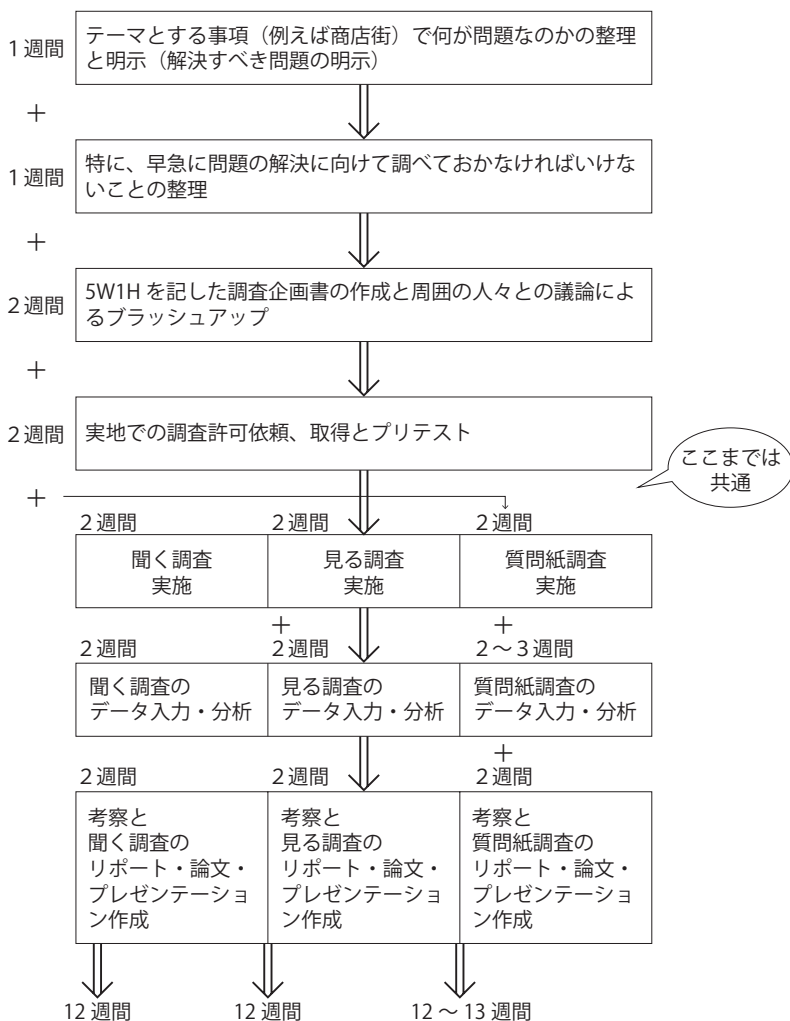


図 3 スケジュールのモデル  
 (2～3 人くらいのグループレポートの場合、  
 複数の場合はそれなりのボリュームが求められる)

## 第 2 章

---

### 調べ方とデータのいろいろ ——どのようなデータを集めるのか